

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21401006

研究課題名(和文) 1920 - 40年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究

研究課題名(英文) Comparative study of ethnic policy of China and USSR from 1920's to 40's

研究代表者

上野 稔弘 (UENO, Toshihiro)

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号：10333907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円、(間接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では主に中国の新疆における1920～40年代にかけての中華民国とソ連の边疆民族政策の展開およびその相互影響を検証すべく、国内外の諸機関を訪問し、関連する公文書等の一次史料を重点的に検索・閲覧・収集・分析した。

これによりソ連が盛世才統治期を中心に新疆に対して積極的に関与し、影響を強めて資源開発にも着手していた状況、および中国側の边疆統合構想の変遷や、ソ連の边疆における影響に対する反応等について、史料的裏付けをとるとともに、いくつかの新しい知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：Purpose of our project was to find out, collect and analyze first hand documents preserved in various foreign archives especially in China, Taiwan and Russia to study the development and interrelationship of ethnic policies in Chinese Sinkiang (Xinjiang) from 1920's to 1940's by the government of Republic of China (ROC) and Soviet Union. Consequently, we could find new materials and get new standpoint on such matters as Soviet aggressive intervention and expansion of influence into Sinkiang inner policies including the development of natural resources during the reign by Shen Shi ts'ai - the governor of this province, and ROC's changing scheme on periphery integration and its reaction to the Soviet influence and so on.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：中国 ソ連 民族政策 一次史料 边疆地域

1. 研究開始当初の背景

20世紀末に東西冷戦が終結した後、民族問題およびそれに起因する地域紛争が世界的な問題となった。とりわけ中国とロシアが国境を接する新疆などの地域では、ソ連の解体や中国の市場主義経済への移行に前後してこの問題が顕在化するようになった。その背景には20世紀前半、とりわけ第二次大戦期を中心とする1920年代から40年代にかけての国境隣接地域における中ソの角逐がある。その解明には中国史とロシア・ソ連史という一國史的枠組みを越えた地域横断的なアプローチが必要と考えられた。

折しも冷戦の終結と情報化社会の到来は、20世紀中葉の公文書の機密指定解除や所蔵機関における目録データのネット公開や検索システムの改善などを促進させ、上記問題の歴史的分析における一次史料活用の可能性を大いに高めることが期待された。

2. 研究の目的

本研究は、ユーラシア大陸の大部分を占め、長大な国境線をはさんで隣接する多民族国家中国とソ連における諸民族のおかれた状況とそれに対する当局の民族政策について、対象時期を1920 - 1940年代に設定し、中国近現代史研究を専門とする上野と、ソ連近現代史研究を専門とする寺山がそれぞれの対象国から史的にアプローチし、双方の知見を比較・総合することでこの地域に対する新たな歴史像の構築を試みるものである。

3. 研究の方法

本研究は史料の検索・収集が不可欠であり、上野が中国方面、寺山がロシア方面の史料の収集を分担し、国内外の史料所蔵機関を合同あるいは個別に訪問し、史料の収集を進めた。史料収集の対象はロシアと中国であるが、関連する資料を所蔵する英国や米国、そして日本機関も利用した。中国に関しては史料公開の整備が進展する台湾の関連機関の利用を優先した。こうした史料の収集作業と並行して、研究組織内で史料収集情報の交換と共有を図り、史料の分析に反映させた。そして史料分析結果の一部は学会等での発表といった形で公開を進めた。

4. 研究成果

本研究での成果として、対象時期の一次史料の収集を進め、いくつかの新たな知見を得ることができた。

(1) 資料収集の成果

中国・台湾：台湾での史料収集に関しては、まず国史館において、南京（戦時中は重慶）にあった国民政府の公文書史料および蒋介石関連の史料コレクションを閲覧し、边疆民族問題に関連する一次史料の収集を進めることができた。特に蒋介石コレクションは長らく閲覧が制約されてきたこともあり、デ

ジタル画像での閲覧や電子複写不可という点を踏まえても、利用の便宜が図られたことの意味は大きい。研究期間中には国史館の所蔵史料デジタル画像化の進行に伴い、台北市内に開館した分館でのオンライン閲覧が可能となり、史料閲覧の便宜が格段に向上した。また中央研究院近代史研究所檔案館では外交部が所蔵していた大陸政権期の外交史料を所蔵しており、边疆問題に関わる資料を閲覧することができた。こちら史料のデジタル化により、外交部への事前閲覧許可申請の手続きが簡素化され、訪問後の申請で当日閲覧が可能になった。両機関が所蔵する公文書には新疆をはじめとする边疆民族問題、およびこれに関わるソ連の動静についての報告、また国民党幹部や地方官僚から提出される対策案や政策提言などが含まれ、中央政府にどのような関連情報や提言が寄せられていたのかを知ることができる。またこれら文書に対して蒋介石が指示を記しており、彼の边疆民族問題への対応を知る上でも重要な史料群である。

台湾ではこのほか、国家図書館や国立台湾大学図書館、国立政治大学社会科学資料館において中華民国大陸政権期の新聞資料および中国边疆民族問題に関する先行研究資料を収集した。

ロシア：ロシアでの史料収集に関しては、モスクワのロシア国立政治社会史史料館所蔵のソ連中央政治局の新疆関連資料を収集したが、事前に想像していた以上に、新疆関連の史料の閲覧に制限があることが判明した。およそ20日分の新疆に関する政治局決定が今日に至るまで閲覧を許されていない。この状況はロシア連邦国家史料館所蔵のスターリン、モロトフ、及びベリヤの特別ファイルに含まれる新疆関連資料にも当てはまり、この3フォンドの特別ファイルに関する目録が出版されて以来約20年間にわたって新疆関連史料の閲覧制限は続いている。一方でこのロシア連邦国家史料館では、ソ連ソヴナルコム（人民委員会議＝閣僚会議に相当）の史料の中にある程度の貴重な史料を見出すことができた。ロシア国立軍事史料館の陸海軍事人民委員部総務局フォンド（フォンドNo.4）にも新疆関連の史料が保管されていることを従来から確認していたが、このフォンドの史料にも閲覧制限が存在し、多くの史料を閲覧できなかった。ただし、同史料館の中央アジア軍管区のフォンドの中に保管されている新疆関連史料のいくつかを閲覧し、論文執筆に利用することができた。またロシア経済史料館では、近年になって公開の始まった新疆におけるソ連の地質学者による石油、錫などの資源探索に関する史料を閲覧することができた。この他ロシア連邦外務省史料館にも新疆関連の史料が保管されている可能性が高いが、経験的に同史料館の閉鎖性が高いこと、時間的に余裕がなかったことから同館における史料収集は行っていない。この

ような史料の公開状況であるため、先行研究の数は限定される。しかし旧レーニン図書館では一般の閲覧に供されず現在も特別保管庫に存在する新疆関連の先行研究を複写できたほか、日本国内で取得できなかった先行研究を数多く複写することができた。

欧米： イギリスでの史料収集に関しては、大英図書館アジア・アフリカ閲覧室所蔵の旧インド省文書および国立公文書館所蔵の外務省・旧陸軍省文書等を閲覧した。当時イギリスは新疆のカシュガルやウルムチに領事館を設置しており、閲覧・収集した史料にはこれら領事館から本国に送られた現地の政治的経済的社会的動静、中国中央政府や現地ロシア人の対新疆活動の状況等に関する報告、およびこれに対する外務省や旧陸軍省、旧インド省の分析・判断を示したメモが含まれており、新疆をめぐる中ソ双方の動静やイギリス側の対応を知る上で貴重なものである。特に英国立公文書館は文書のデジタルカメラによる撮影を認めており、史料情報の収集を効率的に進めることができた。

アメリカでの史料収集は、スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵の『蒋介石日記』、中国国民党文書および亡命白系ロシア人の文書等を閲覧した他、米国立公文書館所蔵の外交文書、米国議会図書館所蔵のラティモア文書を閲覧した。『蒋介石日記』は順次公開開始時より中華民国史研究における重要性から注目されていたが、本研究課題開始時期に全巻が公開され、边疆民族問題に関する記述部分を読み進むことができた。『蒋介石日記』では断片的ながら边疆民族地区における動静について言及した記述が散見され、蒋介石の边疆民族問題に対する観点およびその変遷、彼の問題解決に向けた構想構築過程を把握する上で貴重な資料である。またラティモア文書には彼が米国顧問として中国に赴任していた時期に蒋介石に提出した边疆問題対策構想の原本、蒋介石や国民党幹部と边疆民族問題について交わした談話内容を含む現地報告書などが含まれ、彼の視点から当時の中国边疆民族問題をとらえることができる重要な史料である。

日本： また日本においては、アジア歴史資料センターがWeb公開している外務省外交史料館および防衛省防衛研究所の公文書史料を有効活用しつつ、未公開史料や彩色史料、判別困難な資料については両機関を直接訪問し史料原本を閲覧した。外交史料館ではデジタルカメラによる史料の撮影が可能となり、史料収集の効率化および彩色史料の収集に役立った。

このほか国内の大学等が所蔵する欧米の公文書マイクロフィルムや公文書データベースを利用し、史料の収集を進めた。またマイクロフィルム史料や刊行された公文書史料集などについても可能なものについては購入・入手した。

(2) 史料分析から得られた知見

これら収集した史料の分析から得た知見は、以下のようにまとめられる。

ソ連に関しては、史料の公開状況についても述べた通り、ロシア当局が現代の露中関係にも悪影響を与えていると考えているためか、今日に至るまで新疆におけるスターリンの政策のうち重要な事項を秘匿していることが確認できた。明らかになったことを叙述する一方で、70-80年前の事象について現在も秘匿する史料が存在していることを確認することも歴史研究にとっては重要なことであろう。この状況を踏まえ、閲覧できた史料にのみ基づいて成果を簡単にまとめると、(a) 自然の障壁で隔てられていないため、帝政時代から経済的交流、人の往来が活発であった新疆との関係（カザフスタンが主な国境となる）は、革命後に白系ロシア人部隊が新疆に逃亡したためソ連当局にとっては懸念する地域の一つとなったが、従来から地域住民同士で行われていた経済関係は中ソ関係の悪化にもかかわらず継続し、それはトルクシブ鉄道開通によりさらに発展し、ソ連が圧倒的に優位な立場を占めるに至った。(b) 満州事変の勃発がソ連の対新疆政策を考察する上で大きな比重を占めることが明らかとなった。満州国から遠く離れているにもかかわらず、モンゴル同様、日本の軍部の新疆への進出を憂慮し、同時期に新疆領内で頻発した省政府に対するウイグルその他の少数民族による反乱鎮圧のため、ソ連政府は度々赤軍部隊を派遣してそれに協力した。それと同時に、軍事顧問、各種専門家の派遣による新疆政府強化の試み、通商関係の改善、輸送路の整備、クレジットの供与、住民に対する融和策としての疫病対策、保健政策、ムスリムに対するメッカ巡礼提供等の諸施策を実施に移した。(c) スターリンのカウンターパートとして約10年間新疆で独裁的権力をふるった盛世才との関係に特に焦点を宛てて、彼とスターリン指導部との往復書簡などを紹介することによりその特徴を明らかにした。また、当初は新疆諸民族に対する平等政策を実施していた盛世才もソ連の影響を受け、スターリン時代のソ連で行われていた住民弾圧を輸入する側面があったことも明らかにした。(d) 日中戦争勃発後、新疆はソ連が中華民国に対して行う軍事・経済支援の通過ルートとしてきわめて重要な役割を果たしていくが、その過程についても明らかにできたが、一方で1930年代後半以降、資源探索遠征隊がソ連から新疆に派遣され、石油、錫その他の希少金属の探索が実行に移されたことについても明らかにできた。(e) 最後に、いわゆる三区革命におけるソ連の役割についても僅かだが言及し、中華人民共和国による新疆支配までの歴史をまとめることができた。

中国に関しては、『蒋介石日記』および国民政府・蒋介石関連の公文書の収集・分析を

通じて、1930年代後半から1940年代末にかけての時期において、蒋介石が辺疆民族問題、なかんずく新疆をめぐる中ソ関係に対して、どの程度情勢を把握し、またどのような判断を下していたのかという点について、ある程度把握することができた。具体的には：(a) 1930年代後半において蒋介石は、ソ連に対して日本以上に脅威を感じつつ、民族政策についてはソ連の連邦制を高く評価し、徳王らによる内蒙古高度自治運動への対応を契機に辺疆民族地区に対して高度の自治を容認し、「五族連邦」を構成する考えを明確にした。しかし外国勢力の辺疆地域への勢力伸長という状況の下でこの構想を放棄するに至る。(b) 蒋介石は日本の対米開戦を好機とし、反ファシスト戦線の展開や戦後体制の構築という文脈で、同じく連合側にあるソ連やイギリスなどから中国辺疆での譲歩を引きだそうとした。特に独ソ戦の勃発を契機に盛世才が親ソ路線を転換して国民党政権への接近をはかったことで新疆からソ連の影響力を除去しようとした。しかしソ連の対日参戦が先延ばしされる中、新疆ではモンゴル軍侵攻やイリ勢力による東トルキスタン独立運動が起こり、ソ連の関与が疑われながらも確証をつかめないうまま、中ソ同盟条約締結交渉では新疆や中共などの問題へのソ連の不干渉と引き換えに外モンゴルの独立の容認に迫られた。(c) 蒋介石は戦争末期には清朝型のゆるやかな辺疆統合を志向し、終戦後は高度自治の容認による辺疆諸民族の中央への帰順と国外勢力の影響排除を期待したが、新疆やチベットからの要求の高まりに失望し、戦後の憲法制定過程で高度自治関連規定を取り下げるに至る。(d) 戦時・戦後を通じて蒋介石は辺疆問題をソ連など国外勢力による主権侵害の問題としてとらえ、現地の非漢民族の自決運動に対しても国外勢力の操縦・傀儡化の陰謀に帰結させた。特にソ連に対しては新疆などの地域におけるソ連側の動向やその意図を十分に把握できないことへの焦燥と猜疑があり、そのことが蒋介石政権の戦後辺疆民族問題に対する取り組みに少なからず影響を与えた。(e) こうした経緯を踏まえると、1950年代以降共産党政権の下で辺疆民族問題に一応の解決が図られた背景には、東西冷戦および中ソ対立という国際環境の中で辺疆民族地域から国外勢力の影響を相当程度排除したという事情があり、1980年代以降の改革開放政策による隣国との往来再開が民族運動の再活性化につながっていると見ることができる。

こうした知見については、日本および海外の先行研究においてもある程度指摘されていたが、今回の調査研究により、一次史料による裏付けと検証によりより精度を上げることができた。とりわけ『蒋介石日記』の閲覧とロシア側公文書の中国辺疆問題関連史料の検索・収集は重要である。『蒋介石日記』における辺疆民族問題に関する記述は彼の

辺疆民族問題に対する情勢把握や対応判断の推移を知る上で重要であり、上野はこの点について学会で報告しており、今後の論文化に向けた作業を継続している。またロシア側公文書の活用は、ソ連中央の中国辺疆民族問題への関与の程度を精確に分析することとなり、中国の従来研究や日本および欧米などの先行研究において断片的引用にとどまっていた史料情報の詳細を明らかにし、また従来研究では扱われていなかった資料の存在も明らかにした。ロシア側史料の分析成果については寺山が今年度中に単著として刊行する予定である。今後の中ソ辺疆民族史の研究に大きな影響を与えらると思われる。

本研究課題については上述のような成果を得られたが、史料の収集に対しては、今後の文書公開状況の進展に合わせた継続的調査や、収集した史料についてさらに分析を進めることを考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 15 件)

(1) 上野稔弘：「書評：柴田哲雄著『中国民主化・民族運動の現在 海外諸団体の動向』」、『中国 21』Vol.39、査読無、2014、201-206 頁

(2) _____, *«Советская политика в 1930-*

вмешательства СССР»,

_____ , 2013, c.138-198.

(3) _____, *«Советская политика в*

1930-

фактор», _____ С. Папков,

_____ , 2013, c.222-251.

(4) 寺山 恭輔：「研究動向：戦前期ソ連の対日政策—既刊史料集の再検討」、『東北アジア研究』15号、査読有、2011、107-119 頁

(5) 寺山 恭輔：「反歴史捏造委員会設立とロシアにおける歴史観をめぐる闘争」、『日本国際問題研究所ロシア研究会報告書』、査読有、2010、134-150 頁

(6) 寺山 恭輔：「第二部 第五章 近代化と社会主義 5.1 「社会主義時代のシベリア・極東」」、岡・境田・佐々木編『東北アジア』(立川武蔵・安

田喜憲監修『朝倉世界地理講座:大地と人間の物語』2)、朝倉書店、査読無、2009、140-149頁
(7) 上野 稔弘:「第二部 第五章 近代化と社会主義 5.4 「現代の中国東北」」、岡・境田・佐々木編『東北アジア』(立川武蔵・安田喜憲監修『朝倉世界地理講座:大地と人間の物語』2)、朝倉書店、査読無、2009、171-185頁

〔学会発表〕(計 3 件)

- (1) 上野稔弘:「第二次大戦終結前後の新疆と中ソ関係」, 20世紀ロシア・中国史再考ユニット 2013年度第1回研究会、2013年12月26日、東北大学
- (2) 寺山恭輔:「ソ連の対新疆政策」, 20世紀ロシア・中国史再考ユニット 2013年度第1回研究会、2013年12月26日、東北大学
- (3) 上野 稔弘:「蒋介石にとっての辺疆民族問題」, 日本現代中国学会、2009年10月18日、神戸大学

〔図書〕(計 3 件)

- (1) 寺山恭輔:『スターリンと新疆:1931-1949年』, 社会評論社、2014【発行確定】、全800頁
- (2) 上野稔弘: 瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』(上野担当箇所:第9章「中国の国家・民族論の系譜における中華民族多元一体構造論の位置づけについて」253-266頁)、昭和三堂、2012

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 稔弘 (UENO, Toshihiro)
東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号: 10333907

(2) 研究分担者

寺山 恭輔 (TERAYAMA, Kyousuke)
東北大学・東北アジア研究センター・教授
研究者番号: 00284563

(3) 連携研究者

()

研究者番号: